コミュニケーション能力の素地を育む外国語活動

～必然性のあるコミュニケーション活動を通して～

1．　研究テーマ設定の理由

（1）学校提案とかかわって

学習指導要領外国語活動の目標は，「外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。」と示されている。つまり，外国語を通した「体験的な言語や文化の理解と気づき」「積極的なコミュニケーションをとろうとする態度の育成」「外国語の音声や基本的表現の慣れ親しみ」の3本柱の学びを子ども達が行うことでコミュニケーション能力の素地を養うことに繋がっていく。したがって，この3本柱も学びの質として考え，それぞれに対して生じてくる課題に向かって吟味を生み出す対話を充実することでコミュニケーション能力の素地を拡げていきたい。本研究では，他言語も触れるが英語に焦点を当てて行う。

① 外国語活動における協同的な学び

外国語活動における協同的な学びは，辻(2010)を参考に組み入れていく。

【プロジェクトを組み入れた学び合い】

協同学習では，一人の力では達成することが難しい課題を何人かで力を合わせて成し遂げることができる利点がある。この利点を最大限に生かすために，プロジェクト型の協同学習が考えられる。プロジェクトにすると達成すべき目的が明確になり，成し遂げた後の子どもたちの充実感や満足感が高くなる。そこに，必然性が生じると考えている。

今年度は，オーストラリアの小学校との交流プロジェクト，京都や奈良の外国人観光客に和歌山をピーアールするプロジェクト，長崎の平和公園を訪れている外国人に平和を伝えるプロジェクト，京都大学の留学生との国際交流プロジェクト，京都外国語大学のジェフ・バーグランド教授の授業に参加し大学生との協同学習プロジェクト，和歌山在住の外国人との文化体験プロジェクトを計画している。

【小グループ間同士の高め合い】

協同学習は，小グループ間でも威力を発揮する。競争するのではなく，協同してよりよいものを創り上げる充実感を得ることができる。例えば，京都や奈良の外国人観光客に和歌山をピーアールするプロジェクトや長崎の平和公園を訪れている外国人に平和を伝えるプロジェクトでは，4人の小グループで実施する。このプロジェクトでは，簡単な英語を使って和歌山をピーアールしたり，平和の大切さを伝えたりする。教師が，子どもたちの実態等を考慮して英文の台本を作成する。台本の英文を担当する者を能力や興味に合わせて子どもたち主体で決めさ

せていく。そして，グループのメンバーで協力し合いながらプロジェクトの達成をめざす。

【高いレベルの課題設定】

一人の力では到達できないような高いレベルの課題を設定し，小グループで力を合わせて取り組ませる。課題が高ければ，達成した場合の子どもたちの満足感や充実感が高くなる。

② 外国語活動における焦点化

必然的なコミュニケーション活動を子どもたちが体験する過程で，「興味・関心」「人間関係」「表現力」「言葉」「文化」の5つの焦点化を図っていきたい。この5つは，学習指導要領が示している外国語活動の目標を達成するためにも合致したものとなっている。さらに指導者が提示する課題に対して，子どもたちが課題意識をもって授業に臨めるようにするための焦点化でもある。焦点化するに当たっては，本田(2011)の外国語活動カリキュラム開発を参考にし，子どもたちの実態にも合わせて表1のように整理した。

学校提案での「学びに向かわせていく焦点化」は，「興味・関心」「人間関係」「文化」が対応しており，「本時の中での学びの質の高まりを意識した焦点化」は，「表現力」「言葉」が対応している。

興味・関心	楽しみ	その場に適した態度で楽しんで活動する。
	積極性	積極的に活動に参加する。
	集中力	集中して活動に取り組む。
人間関係	協力	協力して活動に参加する。
	助け合い	助け合って活動に参加する。
	認め合い	認め合って活動に参加する。
表現力	笑顔	笑顔でコミュニケーションをとろうとする。
	アイコンタクト	アイコンタクトを入れてコミュニケーションをとろうとする。
	ジェスチャー	ジェスチャーを使ってコミュニケーションをとろうとする。
	声量	適切な声量でコミュニケーションをとろうとする。
	工夫	工夫してコミュニケーションをとろうとする。
言葉	理解	英語の単語や表現の意味を理解しようとする。
	聞き取り	英語を聞き取ろうとする。
	発音	英語を発音しようとする。
	リズム	英語のリズムに慣れようとする。
	会話	英語を使ってコミュニケーションをとろうとする。
	気づき	日本語や外国語の類似点や相違点に気づこうとする。
文化	理解	日本や外国の文化を理解しようとする。

表1　外国語活動の学びに向かわせていく焦点化

（2）外国語活動でめざす子ども像

子どもたちは，コミュニケーション活動で用いる英語の表現に慣れ親しむ活動に対して積極的に参加することができている。英語の表現に慣れ親しむ活動は，ネイティブスピーカー講師と担任とのティーム・ティーチングの授業（年間30時

間程度）で実施している。

外国語活動では，英語のゲームや歌などを何の目的もなく体験させ，英語に慣れ親しむことができる子どもを目指しているのではない。まず，外国語に限らず，相手のことを思いやって受容できる姿勢をもつことが基本となる。その上で，外国語である英語や言語以外の伝達方法をコミュニケーション活動の中で体験的に使うことで，相手に伝えることができた喜びや相手の伝えたいことが分かって嬉しいなどと感じられる子どもを目指したい。コミュニケーション活動を行うためには十分に英語の音声や基本的表現に慣れ親しんでいけることが必要である。子どもたちが，コミュニケーション活動で使う表現をゲームや歌，クイズなど発達段階に合致した楽しい活動で出会い，副次的に英語の音声や基本的表現に慣れ親しめていけるようにする。英語に限らず，すべての言語に共通する話す声の大きさ，速さ，間合いの取り方などにも意識できるようにする。また，相手の言うことが聞き取れなかったり，理解できないときに使用するコミュニケーション方略（聞き返し，ジェスチャー，表情など），や図，写真，実物などの提示などにも子どもたちの側から気づいていけるように支援していく。

伝えるためには，伝えるための目的を子ども達がしっかりともつことが大切である。また，誰に伝えるのか伝える相手もはっきりと意識しなくてはならない。コミュニケーション活動を行う相手は，オーストラリアなどの子ども達，京都外国語大学の学生，京都や奈良の外国人観光客，などを考えている。伝え合う内容は，「英語ノート」と関連させていく。

２．外国語活動における「学びの質の高まり」

外国語活動における学びの質の高まりは，子どもたちが，さらにコミュニケーションを取ろうとする意欲を高めたり，達成感や成就感などを得られたりすることが考えられる。また，自国や他国の文化に興味を持ったり，表現力や言語面を高めたりしたいとさらに願うことも考えられよう。

具体的な方策として必然性のあるコミュニケーション活動を通してコミュニケーション能力の素地づくりをめざしていく。

３．研究の展望

今年度は，6 年生に焦点を当てて研究を進めていく。英語ノートを活用しながらコミュニケーション活動を各単元で必ず組み入れてコミュニケーション能力の素地を拡げることができるように工夫する。具体的な単元として，「アルファベット」「いろいろな文字」「自分たち紹介」「できること紹介」「行ってみたい国」「自分の１日」「劇」「将来の夢」を取り扱う。これらの単元は，英語ノート２の単元構成に準拠していく。さらに必然性のあるコミュニケーション活動を数多く経験させ，めざす子ども像に迫りたい。

各単元で，子どもたちがスムーズにコミュニケーション活動に移っていくことができるために，辻（2009）の英語活動における授業展開プロトタイプを活用していく。具体的には，単元や授業を「ウォームアップ」「コミュニケーション場面の提示」「聞くことに慣れる活動」「発音することに慣れる活動」「準コミュニケーション活動」「コミュニケーション活動」「振り返り」の順序で構成していく。

以上のことを積み重ねることによって，最終的にはコミュニケーション能力の素地を育んでいきたい。

さらに，1-(1)で示した焦点化された 5 つについては，子どもたち自身が振り返ることができるような方法を研究していきたい。この手法により，メタ認知を高めることで外国語活動の評価に結びつけたいと考えている。

４．研究の評価

1-(1)で示した焦点化された 5 つを細分化した 18 項目について量的，質的データを集めて検証する方法をとりたい。量的データでは，5 件法で取る計画である。質的データでは，記述を分析していく。さらに，ビデオや音声などの記録からも振り返り，子ども自身の変容に気づいていけるか明らかにしたい。

以上の方法によって最終的には「言語や文化についての体験的な理解や気づき」「積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」「外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ」のひろがりをつかめるようにして，本研究の評価を行いたいと考えている。研究授業の際には，指導助言者をはじめとする他者の意見も参考にしていく。さらに，英語教育を専門とする大学教員からの指導助言も受けていく計画である。

参考文献

辻　伸幸.(2010).「小学校外国語活動における実践・学びの質を高める協同学習」.『英語教育』2010 年 7 月号.大修館書店

本田勝久.(2011).「小学校外国語活動における評価」.『英語教育』2011 年 5 月号.大修館書店

辻伸幸.(2009).「小学校英語活動における授業展開のプロトタイプ開発」『和歌山大学教育学部紀要　教育科学』第 59 集　pp125-130